

第128、132、142・144、148、153次調査出土瓦報告

1 はじめに

藤原宮の発掘調査では、瓦磚類の出土が膨大な量にのぼるため、紀要に報告する時点で瓦の出土点数の集計が完了していないことも少なくない。ここでは、紀要報告時点で瓦の出土点数の集計が完了していなかった第128、132、142・144、148、153次調査出土瓦（『紀要 2004・2005・2007・2008・2009』）について、集計が完了したのでまとめて報告する。軒瓦の型式別の集計については、表16に示した。今後は、今回報告した点数が、各調査における正式な瓦磚類の総出土量とする。なお第142・144次調査については、軒瓦の点数が『紀要 2007』と変わっていないので省略した。

2 各調査から出土した瓦磚類

第128次朝堂院回廊東南隅の調査 軒丸瓦4型式8種59点、軒平瓦5型式11種49点、丸瓦7,516点（1,018.4kg）、平瓦17,563点（1,913.9kg）、鬘斗瓦8点、面戸瓦236点、隅切平瓦7点、ヘラ描き丸瓦12点、ヘラ描き平瓦3点、不明道具瓦7点が出土した。

建物廃絶時に廃棄された軒瓦に関しては、軒丸瓦では朝堂院所用瓦である6181Aと6281Bがもっとも多く、6275Dが続く。軒平瓦に関しては、全体の出土数は少ないものの、回廊に多く用いられる6642・6643型式よりも、朝堂院所用瓦の6641F・Cのほうがわずかに多い。これらは出土位置から考えても、朝堂院だけでなく、朝堂院回廊でも使用されたと考えるほうが妥当であろう。すでに、回廊付近から出土する軒瓦の型式は分散する傾向にあることは指摘した（石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究V』奈文研、2010）。おそらくは、回廊にはさまざまな型式の軒瓦を混用して使用していたと考えられる。

また、朝堂院東面回廊の東を流れる造営期の南北大溝SD9815からも瓦が出土しており、軒瓦や道具瓦に関しては表17に示した。SD9815を埋めた整地土は、東面回廊基壇位置まで及んでいる可能性があり、東面回廊東雨落溝SD8975は、この整地土を削り込んで造られている（『紀要 2004』）。したがってSD9815は、東面回廊造営より

も先行し、回廊が完成する以前に埋められていたと考えられる。SD9815埋土第2層からは、多量の本片や檜皮とともに、大宝元・2・3年（701～703）の紀年銘をもつ木簡が出土しており、朝堂院回廊の造営が大宝3年以降まで遅れる可能性が指摘されている。SD9815から出土する瓦は、使用痕跡があまりみられず、細かく打ち欠いた瓦や、完形に近い瓦も多い。また、面戸瓦の出土が極端に多いなど、出土する瓦の様相にも偏りがみられる。さらに、軒瓦については、主に朝堂院や朝堂院回廊で用いられる瓦が主体となって出土している。これらは、朝堂院回廊周辺における造営期の瓦の廃棄状況を示していると思われる、宮造営後半期の瓦生産の状況を知る手がかりとして注目できる。

第132次朝堂院東第三堂・東面回廊の調査 軒丸瓦6型式14種96点、軒平瓦5型式11種146点、丸瓦9,117点（1,118.1kg）、平瓦35,144点（3,504.8kg）、鬘斗瓦9点、面戸瓦87点、隅切平瓦5点、隅切丸瓦1点、ヘラ描き丸瓦17点、ヘラ描き平瓦6点が出土した。軒瓦の数量に関しては、『紀要 2005』の報告時よりも若干増加しているものの、大きくは変わっていない。

朝堂院東第三堂所用瓦は、出土位置と点数からも従来の指摘どおり、軒丸瓦は6273B・C、6281A・B、軒平瓦は6641C・E・Fと考えられる（『紀要 2005』）。朝堂院東面回廊周辺においては、瓦の出土は朝堂院東第三堂より少なく、出土する軒瓦の傾向も大きく異なる。軒丸瓦は出土点数が非常に少ないため所用瓦を特定することは困難だが、軒平瓦では、6561A（4点）、6642A（6点）・C（4点）の出土が目立つ。このことから、これらの軒平瓦が第132次調査区付近の東面回廊で用いられていたと考えられる。

第142・144次朝堂院東第四堂・東面回廊の調査 丸瓦6,516点（711.8kg）、平瓦17,809点（1,678.2kg）、鬘斗瓦1点、面戸瓦129点、隅切平瓦1点、ヘラ描き丸瓦27点、ヘラ描き平瓦33点が出土した。

第142・144次調査においては、丸・平瓦の出土量に対して、面戸瓦の出土が際だって多い。面戸瓦は調査区全域で出土し、窪地SX10606などの造営期の遺構のほか、宮整地土や耕作溝、床土などからも出土しており、出土地区・層位ともに一定の傾向をみない。したがって、第142・144次調査区において面戸瓦の出土が多い理由是不

表16 各調査における出土軒瓦集計表

	型式・種		調査回数			
			128次	132次	148次	153次
軒丸瓦	6233	A			2	1
		Aa				2
		Ac			1	
		B		2	3	5
		種不明				1
	6271	A		1		1
		B		1		
	6273	A		3	5	1
		B	1	19	4	3
		C	5	19	1	1
		D		3	1	
		種不明	2		1	
	6274	Ab			3	6
		Ac			4	3
		AbかAc			8	4
	6275	A	1	2	8	39
		B		1	1	4
		C		2	1	3
		D	10	1	1	
		E				2
		H			1	
		I	1			3
	6278	N				2
		G				1
	6279	Aa	1		6	4
		Ab		1		5
		B			8	14
	6281	A	20	18	4	6
		B	16	19		1
		種不明				1
	飛鳥寺Ⅶ				1	
	巴					1
	不明		2	4	22	31
	計		59	96	86	145
軒平瓦	6561	A	3	6		10
		Aa	2			
	6641	Ab	4	3		1
		C	8	24	4	2
		E	4	40	12	3
		F	9	18	2	3
		N	2			
	6642	A	5	12	2	1
		B		1		2
		C	5	4		5
		種不明				2
	6643	A			3	1
		Aa		1	2	32
		Ab				2
		B	1		1	2
		C	1		7	19
		D		1	2	3
		種不明				2
	6646	Ba			1	3
		C				3
		D				1
	6647	Ca			4	3
		D	2			
	6691	F		2		
	重弧文				1	2
	不明		3	32	21	41
	計		49	146	62	143

表17 第128次調査SD9815出土軒瓦および道具瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式・種	2層・3層	最上層・1層	型式・種	2層・3層	最上層・1層
6273C		1	6561A	2	
6275D		1	6641Ab		1
6279Aa	1		6641E		1
6281A	1	1	6641F	3	1
6281B	1		6642A	2	
計	3	3	6642C	1	
道具瓦			6643C		1
種類	2層・3層	最上層・1層	6647D		1
面戸瓦	91	59			
熨斗瓦	2	2			
隅切平瓦	3	4			
計	96	65	計	8	5

明である。

第148次大極殿院南門の調査 軒丸瓦 7 型式15種86点、軒平瓦 6 型式10種62点、丸瓦4,874点 (398.9kg)、平瓦18,627点 (1,385.5kg)、熨斗瓦 2 点、面戸瓦49点、隅切平瓦 6 点、ヘラ描き丸瓦10点、ヘラ描き平瓦42点、文字瓦 (釈読不能) 1 点、瓦製円盤 1 点が出土した。

軒瓦に関しては、出土点数は若干増加したものの、全体の傾向は紀要報告時と大きくはかわらない。藤原宮式軒瓦以外では、飛鳥寺Ⅶ型式同範の素弁九弁蓮華文軒丸瓦や、重弧文軒平瓦が各 1 点出土している。

第153次朝堂院の調査 軒丸瓦 9 型式18種145点、軒平瓦 7 型式16種143点、丸瓦5,779点 (664.5kg)、平瓦31,181点 (2,617.2kg)、熨斗瓦27点、面戸瓦70点、ヘラ描き丸瓦10点、ヘラ描き平瓦53点、鬼瓦 1 点が出土した。

軒瓦については、軒丸瓦6275Aや6279Bなど、数が増加した型式があるものの、いずれも小片のため『紀要2009』で報告した出土傾向に大きな影響は与えないと思われる。藤原宮式軒瓦以外では、中世の巴文軒丸瓦 1 点と、重弧文軒平瓦が 2 点出土した。また灰褐色土からは、重弧文鬼瓦が 1 点出土しており、第160次調査出土の鬼瓦片と接合した (『紀要 2010』)。

3 おわりに

以上、紀要報告時に集計が完了していなかった藤原宮の調査出土瓦磚類について報告した。なお、第136次朝堂院東第六堂に関しては、瓦磚類の出土量がコンテナ4,000箱以上という膨大な数にのぼるため、現在も整理・集計を継続中である。これについても、集計が終わり次第、報告する予定である。 (石田由紀子)